

平成21年4月1日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17520177
 研究課題名（和文） バロックおよび啓蒙主義時代のドイツ文学における才能と職業と責任について
 研究課題名（英文） Talent, Occupation, and Duty in the German Literature of the Baroque and the Enlightenment.
 研究代表者
 佐藤 正樹（SATO MASAKI）
 広島大学・大学院総合科学研究科・教授
 研究者番号：90131143

研究成果の概要： バロック時代から啓蒙主義時代にいたるドイツ語圏の詩人は、かならずしも詩作を自身の「職業」とすることはできなかった。しかし世俗の「職業」と詩的創作とのあいだの乖離を苦痛とを感じるようになったのは、バロック末期から啓蒙主義時代にかけてのことであり、その典型は、時代は下るがヘルダーリンである。彼らにはルターやシュペーにみられる具体的な「(宗教的) 使命」が欠如し、その状況はそのまま現代人にまでつながっている。それに変わるものとして、本研究は「責任」の概念を提唱する。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,000,000	0	1,000,000
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,500,000	300,000	2,800,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：ドイツ文学・バロック・啓蒙主義・天才・職業・使命

1. 研究開始当初の背景

現代は個人主義と業績主義の果てに、個人の業績が重視される一方、才能と職業とが乖離し、業績追求を要請する職業が才能を消耗する時代である。才能・職業の乖離と不幸な関係は、おそらくルネサンスにまでさかのぼるであろうが、そこには「使命」という概念が確固として存在していた。この間の歴史的経緯を、時代を限定して明らかにしたいというのが、申請時の背景・動機である。

2. 研究の目的

才能・職業・使命・責任の関係は今日ますます重要である。これらの調和は個人の自己

実現にとっても、個人の社会にたいする貢献という点においても、十二分に達成されてしかるべきである。ヨーロッパでは「聖書」の段階から中世晩期にいたるまで、人間にはその身分に応じた使命が神によって与えられていると考えられていた。が、「世俗化」の進行にともない、身分と使命との結合が解かれ、個々人はおのが運命に責任をもたねばならなくなった。では、神学的根拠とは別の次元の使命と責任は、詩人たる才能や世俗の職業といかなる関係にあり、それはいかなる変遷を経たか、これを明らかにすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

バロックから 18 世紀にいたるドイツ文学のいわゆる文献研究であるが、文学の概念をできるだけ広くとるところにこの研究の特色があり、研究者の本務校の教育研究理念に照らしても心がけるべき方法である。以下の研究成果には詳述しえないが、本研究が、たとえば宗教家ルター、女子大修道院長カーリタス・ピルクハイマー、画家デューラーなども研究対象としたのは、そのためである。

4. 研究成果

[序] 神はある種の人間に「権威」を与え、他の人々はこれに税を収めて服するべきだと「ロマ書」(13, 1-7) はいう。人間はそれぞれ神によって定められた「使命」を果たさねばならないというこの考え方は、中世盛期ランの司教アダルベロの三身分説によって権威づけられる。聖職者は教育、貴族は防衛、農民は扶養身分だというのである。アダルベロの定式化は当時すでに時代遅れになっていたといわれるが、その後も強い影響力をもった(エラスムス・アルベールス「ロバの嘆き」を参照せよ。Kaiser, Gott und Bauer. Die Zeit des Deutschen Bauernkrieges im Spiegel der Literatur. Hg. v. Günter Jäckel. Berlin 1975. S. 53)。しかし 12 世紀ごろ各地に都市が建設され、大学が呱呱の声をあげるころには、身分の三分法はもはや通用せず、市民(ゼバスティアン・フランクはゲルマーニアにおける第四身分として「市民」があると述べている。Ebda., S. 48-52)、手工業者、商人が誕生し、学生が生れ、知識人という新しい職種が出現する。神の権威にもとづく身分的使命は廃れ、世俗の「職業」が個人主義と結びつくたちで誕生するのである。才能と職業とに新たな関係が生ずる契機はここにあった。

[1] クルックホーン(Paul Kluckhohn, *Dichterberuf u. bürgerliche Existenz*, Tübingen u. Stuttgart 1949, S. 6) はヘルダーリンの詩「Dichterberuf」(1801) を引合いに出して、詩人という天職と市民生活との葛藤は、200 年来詩人を悩ませてきたと述べている。とすれば 18 世紀半ばに詩人はかつてない難問に直面しはじめたことになるだろう。ヘルダーリンはこの詩で、詩人の天命は神の声を人間に伝えることにあり、世俗のいとなみとは別次元の問題だという。『「オイディプース」注解』では詩人に市民としての暮らしを保障すべきことを訴え、母や義弟に宛てた手紙では牧師職を拒み、詩人としての天命をまっとうするためには公職につくことなどできないと、くりかえし訴えている。彼は家庭教師をして生活費の一部をかせぐが、それは「一種の応召義務を免れる唯一実行可能な逃げ道」だったという意見がある。しかしその家庭教師すら彼の意にそぐわず、「こんな人間関係のなかに

いて、遠慮と忍耐の度を加えるほどに、ぼくは潑刺とした精神をますます失っていくしかありません」と母に書き(1798 年 12 月 11 日付ほか)、そうかといって「物書きだけで食べていくのは、あまり他人の言いなりにならずにそれをやり、評判を犠牲にしても生計を立てる覚悟がないかぎり、今では不可能事に近いということが、だんだんわかってきました」、「物書きを職務の犠牲にすることも、職務を物書きの犠牲にすることも好まない[……]。あまり精神を浪費せず、あまり長時間拘束されない職を選びたい」などと言っている(1799 年 12 月 4 日付、ノイファー宛)。これがヘルダーリンの疲労と焦燥感のみならずであり、才能と職業の分裂乖離はヘルダーリンにおいて極限に達している。

同じころ、ゲーテも『詩と真実』(II, 10) に、ドイツの詩人はせっかく持って生れた「精神と能力」を、世俗のいとなみのうちに「刹那刹那の必要に迫られて浪費するしかなかった」と書き、ギュンターの例を引いているが、しかし職業人に詩才が兼ね備わる実例が出現しはじめていることをも指摘する。「天才詩人がみずからの存在を認識し、自分で自分の境遇を切り開き、独立した品位を失わない基礎を築きうる時代が到来するにいたった。」そのもっともすぐれた例がクロプシュトックだという。17 世紀が 18 世紀に変わるころに生きたギュンターは、没後公刊された作品集によって人気を博したバロック最後の詩人であるが、生涯辛酸をなめつけ、詩人が心ゆくまで創作に没頭できるよう、王侯は詩人の生活を保障しなければならないと訴えた。しかしウングェルン=シュテルンベルク(Wolfgang von Ungern-Sternberg, *Die Armut des Poeten. Zur Berufsproblematik des Dichters im frühen 18. Jahrhundert*. In: *Text + Kritik*, 74/75, 1982, S. 85 ff.) によれば、王侯の詩人を扶養すべき義務を説くからには、ギュンターの念頭にあった詩のジャンルが、雇い主たる王侯を称える「機縁詩 Gelegenheitsgedichte」であり、詩人の地位が古典古代やルイ王朝を模した桂冠詩人であったとすれば、その時代遅れの社会的構想が初期近代国家に迎えられるはずはなかった。

ギュンターと同郷のアンナ・ルイーザ・カルシュは詩(多くは機縁詩)によって身を立えた最初の女流詩人だといわれる。その『精選詩集』(1763) は彼女に 2000 タラーの収入をもたらしたが、極貧の境涯から身を起したカルシュはむしろ例外的な存在とみななければならない。カルシュにおいてはそもそも「職業」は問題になりえなかったからである。彼女はただ食べていくこと、世に出ることだけを望んでいた。ベンヤミン・ノイキルヒが、真の詩人をつくりえないのが機縁詩の欠陥だと指摘し、ドイツの政治的分裂ゆえに藝

術の貧困を憂え、多作を戒めたにもかかわらず (Die Gegner der zweiten schlesischen Schule. 2. Teil. Hg. v. Ludwig Fulda [Deutsche National-Litteratur, hg. v. J. Kürschner. 39. Bd.]. Berlin u. Stuttgart o. J. S. 452)、カルシュの耳にそれが届くことはなかった。

裁判所勤務を不本意と感じ、その多忙が詩作とホメーロスの訳業を妨害すると嘆いたビュルガーも、ヘルダーリンほどではないにせよ、自覚する詩才と食べていくための職業との葛藤を解決できなかった詩人の典型である。いや、裁判所勤務が始まったときから彼は詩作が阻害されつつあることを嘆いた。「わたしのささやかな詩的才能にささかなりともみるべき点があるとしても、今の状態が続いたら完全にしおれてしまうでしょう。[……] わたしのホメーロス、あわれなホメーロスが、ほこりをかぶってそこに横たわっています——ここでは一行も続けられません」(1772年9月20日付、グライム宛。Briefe von und an Gottfried August Bürger. Hg. v. Adolf Strodtmann. 1. Bd. S. 70 f.)。「わたしは詩をつくることを完全に忘れしました。もうなにをやっても、チリンともパタンともいいません。[……] せめて仕事と不機嫌とむら気をもっと少なかつたらと思います。」「だれしも二人の主人、詩神とマモンに同時に仕えることはできない、これはたしかに真実であり、大切な真実のことばです。[……] いま職務を軽減する計画があり、心身のすべての力を『ムゼウム』誌に載せる大がかりな文章に注ぎたいと考えています」(1773年4月19日付、76年3月11日付、ポイエ宛。Ebda., S. 100 f. u. 285)。1777年に発表された「書籍の海賊版を防止するための提案」は、詩人の権利を守り、収入を確保するための先駆的な構想で、さすがにギュンターの時代錯誤の提案とは趣を異にするが、詩人の生活苦がいかに過酷なものであったかを物語って余りある。ただしビュルガーも英国の詩人の身分を引き合いに出し、ドイツにおいても詩人の生活を保障して思う存分詩作に取り組ませる度量をもつ君主の出現を訴える文章を書いたことがある。

クルックホーンの言うとおりの、ほぼこの時代に、「職業」は詩人たる「才能」と「使命」とを阻害する原因だと考えられはじめ、生活の糧を得るべき職業は創作の敵となった。創作と政務とを日課において明確に分離しえたゲーテはあの時代にあつて稀有な存在だったのである。

[2] かつて中世の詩人はこのような二律背反を知らなかった。ギュンターがあこがれた宮廷お抱え詩人の一人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデは、「不実が待ち伏せし／暴力が路上を支配し」、「平和と法も傷ついた」時代に翻弄された。ヴァルターも「名誉」と「財貨」が両立しないことを

知るが、これに「神の恵み」を加えた三つの徳を獲得することを理想とした (Deutsche Lyrik des frühen u. hohen Mittelalters. Ed. der Texte u. Kommentare v. Ingrid Kasten. Frankfurt a. M. 2005. S. 472-475)。1220年ごろフリードリヒ二世より封土を授かったことを謝しているが、それまではおおむね放浪生活に明け暮れたのである。しかし宮廷詩人としての矜持をもちつづけ、生きていく労苦が詩作を妨害するとは考えなかった。

ヴァルターの詩はいわゆるミンネザングと政治詩の二つのジャンルにまたり、前者はさらに「高いミンネ」と「低いミンネ」とに分類される。高いミンネは貴婦人が対象となるため、結婚を前提としない愛の告白のかたちをとる。ここでは宮廷にふさわしい洗練されたふるまいと言語とが要求され、それが宮廷作法をさらに洗練する。しかしそれはややもすれば形式に走り、技巧を要求し、ひいては藝術的価値を低下させかねない。低いミンネはこの危険を打開する新鮮なジャンルであった。身分の卑しい女性を性的搾取の対象とみることなく、高いミンネによってつちかわれた女性の徳を称える抒情詩の一種として、それは開花した。ヴァルターは他方で、苦言と批評をむねとする多くの政治詩を遺したが、箴言詩をも加えるなら、それらは一種の「請求書」であり、その背後には、王侯・皇帝などに召し抱えられて当然の詩人であるという自負、矜持があつたのである。

しかし旅の楽士をつらぬいたヴァルターは例外的存在である。多くは詩作によって食べていたのではない。創作は副業というほどでさえなく、閑暇な折り、手すざびに取り組みむものであつて、本来の「職業」は騎士であつた。オスヴァルト・フォン・ヴォルケンシュタインはティロールの騎士階級の出身であるが、10歳のとき、一人の従者とわずかな食糧をあてがわれただけで放浪の旅に出、波瀾に富んだ冒険的な生涯を送った (vgl. Friederich-Wilhelm u. Erika Wentzlaff-Eggebert, Deutsche Literatur im späten Mittelalter 1250-1450 III. Neue Sprache aus neuer Welterfahrung, Reinbek 1971, S. 176-178.)。各国語に通じ、ミンネを体験し、裏切りと策略に負け、「余は四十年に二年ほど足りぬ歳月を／暴れ、狂い、各種の詩と歌とを作りながら過ごした」末に、「余にとって、余の作品への報酬にまさる光明はない」と考えるにいたつた。金銭の不足はいかんともしがたかつたが、金をあさることを貴族らしく軽蔑した。ここには騎士としての矜持があり、その裏面において庶民を見下す態度はその詩にもあからさまに表現されている。もちろん詩に表現された金銭観をそのまま鵜呑みにしてはならず、手もと不如意であつたからには、また伝記的事実に照らしてみても、彼自身は貪欲に金を求めた。しかし

それでもなお、彼の自己理解は騎士であり、そのことと創作とのあいだに乖離を認めることはなかったと考えられる (vgl. Walter Röll, Oswald von Wolkenstein. In: *Genie und Geld. Vom Auskommen deutscher Schriftsteller*. Hg. v. Karl Corino. Reinbek 1991. S. 21-34, insb. S. 25-27.)。

[3] 16世紀の人文主義者にとって、学問と教育と詩作は一体のものであった。教育は一定の収入をもたらしたが、この世紀のもっとも刮目すべき事件は活版印刷術の考案であり、創作から収入を得るための前提が築かれることとなった。とはいえ執筆料は例外的であり、むしろ王侯などから下賜される贈り物のほうが重要な役割を果たした。その事情は17世紀になっても変わらない。

当時、活版印刷術がもっとも効力を発揮したのは宗教改革であった。ルターは教会の刷新を叫んだとき、教皇とその建築熱を支えたメディチ家、二人の神聖ローマ帝国皇帝の後ろ楯であったヴェルザー、フッガー両商会の金融政策との闘争を開始した。ルターは宗教改革家としての経歴を、貨幣経済の功罪と取り組むことから始めたといっている。ルターが論じたのはもちろん詩人の生活ではない。しかしその「二国説」は現世における蓄財行為を承認し、かつ労働倫理を確立する端緒となった。彼は「利子」を容認し、適切な利率を論じたが、「金はサタンのことばである」、「キリストの真の奉仕者は金と奢侈とを問うてはならない」、「大いなる財貨は大いなる困窮をもたらす」、強欲は「信仰を足で踏みにじる」ものだと語ったとしても『食卓説法』。Martin Luther, *Tischreden*. Hg. v. Kurt Aland, Stuttgart 1981, S. 263-267)、それは貨幣経済の否定を意味しない。彼が主張したのはキリスト教徒にふさわしい蓄財行為はいかにして可能かということであった。しかも暴利に釘を刺したのは『暴利についての説教』1519、『取引と暴利について』1524。M. Luther, *Ausgewählte Schriften*. Hg. v. Karin Bornkamm u. Gerhard Ebeling. Frankfurt a. M. 1982. 4. Bd., S. 13 f. u. 5. Bd., S. 138 f. u. 155 f.)、それはキリスト者にふさわしいものなのか、「義」なる蓄財は可能なのかといった単なる抽象的な神学論議ではなく、たとえば『ドイツ国内全都市の参事会員に——キリスト教学校を設置し維持すべきことについて』(1524)に述べられているような具体的な行動指針をとる主張がそこにはこめられていたのである。労働と蓄財には「義務」がともなうのではないかという考え方である。ルターは蓄財から得られた余剰金をキリスト教世界の若者の育成に投入するのはキリスト者にふさわしい行為ではないかと提言する。「神に感謝し神を称えるために」大金の一部を「貧しい子どもたちを育てるための学校に出してほしい。これはほんとうに心から出費されるものだ。」そしてル

ター自身は、「わたしはわたしの義務を果たした」と安んじて言うことができたのである (Ebd., S. 85 f. u. 100)。ルターは贖宥に関する95の命題のなかで、早くも「善行信心」への警戒を呼びかけている。「善行」と引き換えに(個人の)救済を要求するのは、神を相手に商取引をするようなものだったのはマイスター・エックハルトであったが(「神殿追放——マタイ 21, 12 についての説教」。Meister Eckeharts Schriften und Predigten. Aus dem Mhd. übersetzt u. hg. v. Hermann Böttner. Jena 1923. 2. Bd. S. 119 f.)、この点でルターは中世神学を引き継いでいた。善行は救済の前提ではない。神の恩寵はただ待つほかはないのである。蓄財はこうして神と救済にいたる通路を断たれ、たといそれが喜捨献金として善行の一部をなすとしても、現世のしくみに従って行われ、これを差し止めることはできない。ここにキリスト教道徳の規矩をあてがい、「良心練成」の結果としての善行を公共の福祉にたいする義務と結びつけるとき、「職業」は「召命」となる。

ドイツ文学における議論にわざわざルターを持ち出したのは、ルターにおいて「職業」が「召命」となり、職業に、全体にたいする奉仕という「使命」がはじめて付与されたからである。このような歴史的背景からみると、ルターが聖書を翻訳して神学者と聖職者の手から「全体」のために解放し、同じころデューラーが晩年、画業の経験を教科書にまとめ、その知識と技術と経験を人々に公開したのも、職業が *Beruf* となった一つのあかしとみることができよう。したがって「職業」は個々人やその家族の糧を得る手段ではあるが、つねに社会への奉仕という側面をもつこととなり、「召命」「義」、あるいはキリスト教道徳は、職業と結びついたとき、決して抽象的な概念ではない。もしそうであるならば、神の伝声管をもって詩人の「使命」とみなしたヘルダーリンが世俗の職業を、みずからの使命遂行にたいする妨害と感じる感性は、およそルターのあずかり知らぬものであつたらう。たとえばルターのヴォルムス帝国議会における弁論(1521)は、彼の天才と神学者・聖職者たる「職業」と全キリスト教世界への献身という「使命」と「責任感」が溶け合い、それを学問的蓄積とことばの力が支え、ゆるぎない自負心(おのが価値感情)にあふれた散文の傑作である。ルターは皇帝側の自説撤回要求を断固として拒否したこの演説(Luther, a. a. O. 1. Bd. S. 265-269)をつぎのようにしめくくっている。

「このように申し上げるのは、並ぶ者なき貴頭各位にわたくしの教導と警告が必要だからというのではなく、このわたくしがわがドイツにたいして果すべき義務を負う従順な奉仕を控えることを許されないからです」。

[4] バロック時代の詩人は宮廷に属するのが一般的な傾向であり、それゆえ本意か不本意かは微妙な問題ながら、創作だけで生計を立てたフィーリップ・フォン・ツェーゼンは例外的な存在であった(以下 P. Kluckhohn, a. a. O. S. 11-14 を参照せよ)。オーピツは外交官、グリューフィウスは法律顧問官であり、イエズス会士は修辞学教授を務め、ローエンシュタインにとって詩作は公務のかたわら行「余技 Nebendinge」であり、「気晴らし erleichterner Zeitvertreib」である。ヨーハン・フォン・ベッサー、ヨーハン・ウルリヒ・ケーニヒ、ヴェカリーンは各宮廷に仕える式部官であった。グリンメルスハウゼンが旅籠亭主と村長として暮し、そのかたわら三十年戦争の体験をユーモアをまじえて小説化したことは周知の事実である。

フリードリヒ・カップは、学者たちが校正業務への報酬支払は受けたものの、著作にたいして報酬を受け取るのは屈辱的、あるいは紳士らしくないことだと感じていたと書いている。それによればルターは著作にたいする報酬を受け取ったことがなく、「版元にせいぜいのところ数部の献本を要求した程度」であった。「報酬の現金支払は 18 世紀にいたるまで例外であり、つねに少額、いや屈辱的な金額でさえあった。」「皮肉にも出版業者は謝礼を抑制することに成功した。16 世紀後半から三十年戦争にいたる時代は、ドイツ人の職業生活にとって比較的幸福で豊かな時代である。藝術、生業、学問は、17 世紀の最初の 20 年間に頂点に達していた。しかしこの間、このような景気の好転から学者は排除されていたといっても過言ではない」(Friedrich Kapp, *Geschichte des Deutschen Buchhandels bis in das siebzehnte Jahrhundert*. Aus dem Nachlasse des Verfassers hg. v. der Hist. Kommission des Börsenvereins der Deutschen Buchhändler [*Geschichte des Deutschen Buchhandels*. 1. Bd.]. Leipzig 1886. S. 312-316)。ゲーテも「文学書を製作するのはどこか神聖なしごとのようにみられていたので、報酬をもらったり値上げしたりするのは聖職売買かぬかのように考えられた」と述べている(『詩と真実』III, 12)。学者・作家にとって金銭的報酬を受け取ることは矜持にかかわるものだという感性がドイツ人にもあったのは興味深い事実であるが、それが彼らの地位を低くした一因でもあった。むろんそれ以上に三十年戦争がドイツの分裂状態を決定的にし、国土を荒廃させ、職種の如何にかかわらず人々をして金銭に執着させ、視野を狭くし、「使命感」を弱体化したことは否めない。

グリンメルスハウゼンは『不思議な鳥の巣』(1672-73)で、財産をなくした主人公に「ゆるぎない信用」「立派な友情」「名誉」「分別」「正義」の価値に言及させているのは、すさ

んだ世相への皮肉である(Grimmelshausens *Werke in 4 Teilen*. Hg. v. Hans Heinrich Borchardt. 3. Teil. Berlin, Leipzig, Wien, Stuttgart o. J. [1921] S. 337)。ヘックマンは書いている。グリンメルスハウゼンは物事を冷たく突き放して上から見下ろすようには書かない。戦争の惨禍に手を焼く人々の視線で書いた。戦争の混乱に、慈悲深い道化に扮して立ち向かった。道化は何が起っているかを知らず、その単純な期待と想像ではとても平和なき世界への覚悟にはならなかった。が、グリンメルスハウゼンにとっては居酒屋の客たちの喜ぶ顔がなによりの報酬であった、と(Herbert Heckmann, Hans Jakob Christoffel von Grimmelshausen. In: *Genie und Geld*, a. a. O. S. 57 f.)。では、グリンメルスハウゼンの「使命」とは何であったか。それは、人々を慰め、皮肉な笑いをおして現実から距離をとらせ、それを客観的に評価させ、立ち直らせることであつたにちがいない。彼はそれを居酒屋主人・村長としての誇りとし、作家をこの使命を達成するために必要な仕掛けとした。読者、いや聴衆は、身近な村人や旅人というごく限られた人々であつただろう。むろんこの小さな「全体」への献身はグリンメルスハウゼンの名誉になることである。しかしルターのごときたくましい使命感はここにはない。グリンメルスハウゼンの道化的人物たちに全ドイツを語らせるのは無理な注文である。道化たちはごく身近な、眼前の現実を受け入れ、それを客観視するだけで精一杯であつた。その方法は、庶民の俗語を使用し、現実を解釈せずにそのまま受け入れる、つまりは「愚直」に徹することであつた。その目に映るのはごく狭い世界であるが、そこに執着したことが作品に普遍性を与えた。とまれ、ドイツ人の「使命感」を弱体化し、卑俗な狭い世界に向かわせたのが三十年戦争であつたことは事実である。

[5] この過酷な時代にあつて、たくましい使命感を堅持しつづける詩人がいた。イエズス会士であり、魔女迫害にたいする異議申立ての書『重罪への警告』の著者として知られるフリードリヒ・シュペーその人である。残念ながらシュペー書簡集が刊行されていないため、シュペーの個人的な感情の吐露を作品中から読み取るのはむづかしい。しかし唯一の詩集『小夜啼鳥と競いて』にも使命感に燃える詩人司祭の熱情をうかがい知ることができないわけではない。「日本へ船出せんとせし折りのイエズス会士聖フランシスコ・シャヴィエルをうたう詩歌」と「十字架上にありてキリストのなしたまいし悲しみの対話」には、はるか青春時代にイエズス会の先達シャヴィエルに憧れて東洋宣教を志したシュペーの胸に、その夢がいまだに消えないどころか、その実現への熱望が今もって熾烈に燃えさかっていたことを、なによりも

雄弁に物語っている (Friedrich Spee, *Trutz-Nachtigal*. Krit. Ausg. nach der Trierer Handschrift. Hg. v. Theo G. M. van Oorschot. Stuttgart 1985. S. 99 f. u. 226-238)。詩の解釈と自伝的解説はわが国唯一のシュペー・モノグラフィーである、佐々木れいの卓越した学位論文『詩と祭儀——フリードリヒ・シュペーの詩集「Trutz-Nachtigal」に関する研究』(2008)に譲りたいが、この二つの詩はルターよりおよそ百年を経てドイツ語で表現された、才能と職業と使命ないし責任の、もっとも幸福な結合の記念碑である。

[6] ゲーテは『詩と真実』(III, 12)においてヘルダーとクロプシュトックの意義に触れ、諸侯のうちに「学識と厳密な意味での実務能力をもつだけでなく、豊かな精神を有し、前途有望な人物を召しかかえる」者が現れたと述べ、「クロプシュトックがバーデン辺境伯カルルの招請を受けたのは、本来の実務を担当するためではなく、クロプシュトックの存在それ自体が上流社会に高雅と利益とを付与するからだと伝えられた」と書いている。クロプシュトックは娯楽や教訓とは別な文学概念をもっており、旧時代の機縁文学を排した。詩作を神命とみなすクロプシュトックは、そのためにかつてない「名声と威厳」を獲得した。それでも食べていくのは困難だった。クロプシュトックは予約出版という方法を考案し、大成功を収めた。しかしゲーテがここで語っているのは、詩人の存在感、威厳とその文化的影響ということである。偉大な詩人を有する国民は、その詩人をおのが精神的陶冶の糧とすることができる。偉大な詩人はまた国民に誇りと自尊心を授け、文化的アイデンティティを植えつけるのである。ゲーテは新しい時代の到来を予言したのだ。もちろんレッシングほどの作家にしてなお司書として働き、ヴィーラントも教職につき行政官としての収入をあてにしなければならなかった。しかしレッシングはたとえば演劇に新時代をもたらし、ヴィーラントは広範囲にわたる文学的流行を実現した。

[7] 18世紀はすでに世俗化が勢いよく滲透した時代であった。ルターとシュペーの崇高な「宗教的」使命とその遂行としての職業は、ヘルダー・リーンがいかにかの神の伝声管をもってみずから任じて、もはや詩人の使命とはなりえなくなっていた。このような新しい事態を現代の状況に無造作に直結させるべきではないが、全キリスト教世界への義務というがごとき宗教的使命に代るものが必要となった。世界の広狭はともかくとして、少なくともある世界への「責任」という概念がそれである。個人主義が自明なものとなり、個人の業績追求が美德とされる世俗化した世界において、他者ないし世界への責任を果すことの意味は重要であろう。この点で、わ

れわれはふたたびゲーテの世界文学の理念に立ち返る必要がある。なぜならゲーテの世界文学の概念は、個々の国民文学のもつかけがえのない個性を否定することなく、それが他の複数の国民文学をも益するものとなったとき、はじめて世界文学の名に値すると考えるからである。ゲーテはくりかえし「全体」ということを語っている。自他の利益に資することが新しい「責任」であり、現代の「使命」である。バロックと啓蒙主義の時代における詩人の生活と創作との関係を顧みるなら、使命感の弱体化、世俗化の進行と個人主義の強化、国土の分裂、「全体」なるものと文化的統一感の喪失は、詩人の生活をおびやかす、詩人の使命をますます軟弱な抽象概念にした。詩人は個に沈潜し、個に沈潜する読者のたましいに語りかけることをもって使命としたが、それは、公共への奉仕と献身が不可欠な職業から遊離したものとなった。才能はその生活苦のなかで消耗した。啓蒙主義時代以降の詩人はそのような才能の消耗を嘆きつづけたのである。才能と職業と責任(使命)は、ルターの国会演説とシュペーの詩において幸福な結合を見出したが、それはまさしく稀有な例外であった。

[文献補遺] 引用したもののほか、とくに役立った文献から二点をあげておく。

1. Carmen Kahn-Wallerstein, *Pegasus im Joch. Berufung und Beruf*. Berlin u. Weimar 1966.

2. Ludwig Fertig, „Abends auf den Helikon“. *Dichter und ihre Berufe von Lessing bis Kafka*. Darmstadt 1996.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計0件)

[図書] (計1件)

① 訳書＝ライナー・デッカー『教皇と魔女 宗教裁判の機密文書より』[叢書・ユニベルシタス 875] 佐藤正樹・佐々木れい訳、法政大学出版局、2007年。313ページ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 正樹 (SATO MASAKI)

広島大学・大学院総合科学研究科・教授

研究者番号：90131143

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

佐々木 れい (SASAKI REI)

広島大学・大学院総合科学研究科・非常勤講師